

奥奉公出世双六

中老

人のおちどをいふハ
やすけれど奉公する
身ハあひたがいどうがな
しておいとまに
ならぬ
やうに
とり
なし
やうが
あり
さうな
もん
だぞ

御部屋様

われわれなぞの
いやしき身が
このやうに
出世するもの
みな天とうの
おめぐみこれにつけても
おくさまハたいせつに
おもハねバならぬぞかし

上り

老女

ついにない
このはるハ
おひめさまか
みなくよく
つとめたに
よつて
御やく
がへの上
御ほうびを
くだされ
ますゆへ
ありがたく
御いただきなされませ

御側

へいおひめさまハお手ならひを
あそばせそのやうにおあそびに
お身がいつてハなりません
これハしたりまた
そのやうな
きたない
おかほを
あそばして
おむずがりますな

御茶の間

ヲヤくく
おした
くノ
はゝが
あがり
ましたかへ
そんなら
明日の
当ばんと
くりかえて
くださいまし 大かた
この間のゑんだんの事で
まいりましたらう

御小姓

ヲヤまた御前さまハ
あのやうな
おじやうだん
ばかり
おつ
しや
つて
おなぶり
あそばす

表使

どうもそのやうに
おものいりが
かさんでハ
なりません
ごじせつ
がら
ゆへ
おまへがたも
チトおきを
つけられたら
よからうに

御次

ヲゝあぶないく
おまへハこずとも
はやく
おそばに
おつき
もうしていな
いまじきに
とつていく
からさ

御召仕

さくばんは奥へおとまりになつて
わたくしの身に

とつてはどの

やうに

うれ

しう

ござりましょう

ヲヤもうちつと

ねをさげて

下方

ふうに

ゆつてください

御三の間

サアくこんどもつてきました
嶋にハぎよいに
いるのがございます
それはみんなさげませう

部屋子

なんでもおさがりのないうち
たんとあそんでおかぬいまに
琴をさらへと
いハれ
升

御祐筆

ちよつとでも
御返書を

おしたゝめ

あそば

せバ

よいに

いつでもおだいひつ

おきのどく

さまな事だ

御髪上ケ

明日御下やしきの御かへりにはすみだ川の
土手をおひろひ
あそばせ
どの

やうにか

花が

よろ

しいと

おしたの

ものが

申ました

呉服間

どうかして
此おめし
ものをらい
ねんのおなんど
ばらひにいただき

たいものだが
そうむまくゆけば
いいが大かたらい
ねんもくだされ
ものハ
ごゑんにて
たろう

御乳

コレうばや
うばやナ
だまつてい
てはさつき
から
すこしも
ねずに
手まへの
もり
ばかりして
ある

御守

アレくわかさま
おとゝさまがおかゝ
さまのところへ
いらせられ

ました
から
はやく
まいつて
ごきげんを
うかゞひ
ませう

踊

マアこれで
ばんの
道具だても
そろつた
エ、ト
そこで
ヲ、
それく
おつぼねさんの
ちやばんを
かんがえなけりや
ならなんだつけ

御代参

モウこゝハいゝから
ともにゆくものを
いそいでしたく
させてくりやよ

ちと
まはるところが
あるから

御仲居

ヲヤまたけふも玉子やきに
おこんだてが
なほつた
ちやうど
十日に
百丸めしあがつたアアいかな事でも

御末

コレごらん人形町の
上しうやの
くさぞうしハ
いつでもおも
しろくて
よくわかり升よ

御雇

アレすゝがなり升ト
だれが
お出なさい
ませんか
わた
しが

いつ
たら
また
しから
れるで
あろう

御礼上り

イエモウとうから
ごきげんうかゞひに
あがりませうと
ぞんじ
まし

たれども
このやうな
わんぱくが
できまして
つひく
ゑんにん(延引)
いたしました

御めミえ

しほくミの御手
ミせハモウおきゝ
あきなされたから
水くミがきゝ
たいとおほせ

られるマア
とんだ
おひめ
さまの
御このミだ

針妙

モウだんなさまが
おさがりだらう
ドレしごとをやめて
おちやを
わかさうか

ふりはじめ

- 一 おめミえ
- 二 おやとひ
- 三 お礼上り
- 四 おはした
- 五 しんめう
- 六 おすゑ

御はした

此はるのやうにおきやく
さまがあつてハ
ろくく御せんも
あがることハ
できません

そのかハりにハ
いまにおやく
がへが
ござり
ませう

御暇

はゝさんのまへハどの
やうにも
いハうが
とゝさんに
きこへてハ
どの
やうな
めに
あハ
されやうか
しれぬゆへ
これからおばさんの所へいつて
たのミませう